

〔原著論文〕

相談援助実習における実習スーパービジョンの 現状と今後の課題

—実習指導者フォローアップ研修におけるフォーカスグループ
インタビューデータのテキストマイニングから—

渡 邊 隆 文¹⁾ 安 保 尚²⁾ 井 坂 優 美³⁾
土 屋 瑛梨香⁴⁾ 檜 木 博 之⁵⁾ 初鹿野 美 穂⁴⁾
和 光 勇 介⁶⁾ 渡 辺 健 市²⁾ 渡 辺 裕 一⁷⁾

Current situation and issues in field training supervision
for social work students

～Based on the analysis of text mining on focus group interview
with field training supervisors～

WATANABE Takafumi, ANBO Hisashi, ISAKA Yumi,
TSUCHIYA Erika, NARAKI Hiroyuki, HAJIKANO Miho,
WAKO Yusuke, WATANABE Ken-ichi, WATANABE Yuichi

抄 録

近年、福祉に関わる様々な問題が取り上げられ、支援を担う社会福祉専門職の質と量の確保が求められるようになった。社会福祉士の養成においては、これまで以上に現場実習の在り方について大きな期待が寄せられており、実習指導者が果たす役割は大きい。そこで、本研究では平成28年度実習指導者フォローアップ研修のテーマとして取り上げた実習指導者が抱える実習スーパービジョンの課題に焦点を当て、現状と今後の課題を明らかにすることを目的とした。調査は研修参加者を対象としフォーカスグループインタビューを実施した。その後、抽出されたデータを基にテキストマイニングを行った。カテゴリ間の関連を見るために主成分分析を行い、より詳細な分析を行うためクラスター分析を行った結果、7つのグループが抽出された。実習スーパービジョンの現状と課題として、指導者が抱えるジレンマ、スーパービジョンを行う環境整備、スーパーバイザーの自信のなさの3つが示された。

キーワード：社会福祉士

相談援助実習

テキストマイニング

実習スーパービジョン

1) 健康科学大学 健康科学部 福祉心理学科 2) 富士吉田市役所 3) みのりの里いいとみ
4) 山梨赤十字病院 5) 身延山大学 6) 富士河口湖町役場 7) 武蔵野大学

I. 研究の背景

近年、高齢者、障害・疾患、子ども・家族、経済的困窮等、福祉に関わる様々な問題が取り上げられ、支援を担う社会福祉専門職の質と量の確保が求められるようになった。社会福祉士の養成においては、カリキュラム改正や実習の在り方について議論され、これまで以上に養成校だけでなく支援現場の実習指導者への大きな期待が寄せられている。専門職を養成する課程で行われる「相談援助実習」が果たす役割は大きい。ソーシャルワーク教育における現場での実習体験は、教室での講義や演習の過程を通して身につけた価値や倫理、知識や技術を、実際にその対象となる人や状況に対する実践として統合化することを学ぶ上で欠かせないものである¹⁾。

2009年度より社会福祉士の養成課程は新カリキュラムに移行し、実習教育の場における実習スーパービジョンの実践が位置づけられた。また、実習指導者講習テキストでも実習スーパービジョンの特徴として、①実習契約に基づいて行われる、②実習指導者と実習生との間で実施される、③すべての実習生に対して行われる、④定期的に、また必要に応じて随時行われる、⑤利用者ならびに実習生の権利擁護に着目する、⑥養成校の行うスーパービジョンと連動するという6点が示されている。これは、「日本の現状に即し、学生の実態に合わせた実習指導や、実習施設や機関の強みを活かした実習指導が求められている」²⁾現状である。

山梨県では社会福祉士会が中心となり、社会福祉士の相談援助実習の充実のため、実習指導者の育成やフォローアップのための取り組みを行っている。具体的には、実習指導者講習会の受講者（他都道府県等での受講者含む）を主な対象としたフォローアップ研修として、年1回の実習指導者会議を山梨県社会福祉士会と社会福祉士養成校協会山梨県支部の共催で開催である。「実習指導者講習会受講が義務付けられたことによって、実習指導者に対して実践力に加えて一定水準以上の指導力が求められている」³⁾中で、研修は実習指導者の重要な学びの場となっている。

一方で、運営委員として研修に関わる中で、実習指導者同士が実習指導や実習スーパービジョンについて普段抱えている不安や心配が語られている場面を多く見かけた。実習指導者の研修は、単に知識や技術を学ぶ場だけでなく、実習指導者としての言いにくい気持ちを吐き出すことのでき、同じ困難を抱える者同士をつなぐ場になっている。同時に、「仕組みは整ったものの、実践しやすい環境が整ったとはいえ、実習指導者は多くの不安を抱えながら実習スーパービジョンを実践しているという現状」⁴⁾とも指摘されている。

本来スーパービジョンは、「援助者に対人援助の本質を伝えることであり、それが実践できるように援助者を支え、育成し、環境を整えていくこと」⁵⁾である。実習生が『スーパービジョンによって緊張がやわらいだり、不安に思っていたことを素直に話せたので、すごく私にとって心のささえとなった』『日々、実習を行っている中で感じた疑問をその場で聞くことができなかつた際にスーパービジョンという場でその確認がで

きてよかったなど、スーパービジョンとしての機能⁶⁾が発揮できるよう実習指導者を支えるのも重要である。これまで取り上げられなかった山梨県の実習指導者が抱える不安や困難の声を拾い上げ、現場の現状・課題の把握も求められている。実習スーパービジョンの先行研究についても、組織の中でスーパービジョン体制が明確に位置づけられているかといえ、十分な進展が見られているとはいえ、本研究は重要な意義があるといえる。

本研究では、平成28年度実習指導者フォローアップ研修の中で抽出された実習指導者と養成校教員が抱える実習スーパービジョンの現状と課題に焦点を当て、現状と今後の課題を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象および方法

山梨県社会福祉士会主催の平成29年3月5日に実施した「平成28年度実習指導者フォローアップ研修」の参加者である実習指導者15名を対象とした。児童・高齢者・障害児者・行政の福祉施設の職員であり、実習指導経験が1年目からベテランまで幅広かった。実習スーパービジョンは、実習施設の種類・機能、実習指導経験年数等様々な背景によって異なり、可能な限り幅広く実習指導者が置かれている状況を把握するために調査対象とした。

参加者を無作為に1グループ5人程度になるようグループ分けを行い、「実習スーパービジョンを行う際に感じている現状と課題」をテーマに話し合い、フォーカスグループインタビューを実施した。フォーカスグループインタビューは対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音し、録音記録に基づいて逐語録を作成した。

2. 分析方法

実習スーパービジョンの現状と課題を検討するために得られたデータに対してテキストマイニングを行った。本研究では、得られたデータを意味のある段落ごとに分けたものを1件の分析単位として設定した。その結果、159件の分析単位が設定された。各分析単位の内容を吟味し、指している対象が明らかな指示語（あれ、これ、他）の対象語への置き換え、明らかな間違いの修正等を行った。

上記の手続きによって得られた分析単位について、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 を用いて、形態素解析を行った。形態素とは「意味を持つ最小の言語単位」⁷⁾である。出力された形態素を見てみると、本研究の分析意図とは関係しない語彙や誤認識による語彙も数多く抽出された。これらを類義語や不要語の設定によって修正し、再度形態素解析を行った結果抽出された語彙に対して、言語学的手法（設定：すべてのタイプを対象、サブカテゴリによる階層化はせずフラットなカテゴリ出力、グループ化における共起設定なし、作成されるトップカテゴリの最大個数30、カテゴリあたりの記述子数の最小値2）を用いてカテゴリの作成を行った。これは、言語的な視点から似たよ

うな意味を持つ語彙をグループ化する手法である⁸⁾。自動的に作成されたカテゴリを確認したところ、本研究の目的に対して重要な語句がカテゴリとして作成されていなかったり、不要なカテゴリが作成されていたりしたため、カテゴリを手動で追加及び削除する作業を行った。IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4では、カテゴリをいかに作成するか、「分析者にとって意味のある語彙とは何か」⁸⁾に基づいて、すべて研究者に委ねられている。

1つの分析単位内に各カテゴリに該当するテキストが含まれている場合には1、含まれていない場合には0とする2値変数とし、IBM SPSS Statistics Ver. 24.0で使用可能なデータとしてエクスポートした。作成されたカテゴリ間の関係性について検討するため、エクスポートされたデータを使用して主成分分析を行い、算出した成分負荷行列を用いてクラスター分析を行った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については、調査対象者に対して会場にて、①研究の概要に関する項目、②個人情報保護法に関する項目、③侵襲および安全管理に関する事項、④インフォームド・コンセントに関する事項について口頭説明し、その場で本件への調査協力の同意を得た。また、フォーカスグループインタビューの録音について同意を得た。なお、本研究は健康科学大学研究倫理委員会の承諾を得ている（承認番号第12号）。

Ⅲ. 結 果

1. 抽出された語彙

159件の分析単位に対する形態素解析の結果（修正後）、1095の語彙が抽出された。抽出頻度の多かった語彙としては、「いう」、「思う」、「ある」という語彙が多く抽出される結果となった（表1）。

表1 テキストマイニングによる語彙の抽出結果（頻出20語）

いう (79)	思う (54)	ある (52)	くる (37)	やっぱり (35)
やる (34)	ちょっと	ない (33)	学生 (33)	言う (29)
なる (27)	だから (22)	いい (19)	なかなか (18)	でも (18)
そういう (18)	社会福祉士 (18)	すごい (17)	話す (17)	自分 (16)

※()内は当該語彙が本文に含まれていた分析単位を表す。

2. 作成されたカテゴリ

言語学的手法を用いてカテゴリの生成を行い、加えて、手動でカテゴリの作成・追加・削除を行った結果、19カテゴリが生成された（表2）。カテゴリを含む分析単位が最も多かったのは「実習生」で60件（37.7%）、続いて「実習指導者」37件（23.3%）、「実習施設」33件（20.3%）、「実習」31件（19.5%）、「困難」30件（18.9%）、「スーパービジョン」28件（17.6%）となった。

表2 作成されたカテゴリ

実習生 (6 : 60)	実習指導者 (7 : 37)	実習施設 (12 : 33)	実習 (7 : 31)	困難 (17 : 30)
スーパービジョン (5 : 28)	コミュニケーション (6 : 23)	実習計画 (7 : 21)	養成校 (5 : 18)	社会福祉士 (1 : 18)
職員 (8 : 18)	勉強 (3 : 16)	指導 (8 : 14)	業務 (3 : 12)	プログラム (3 : 11)
受入人数 (4 : 11)	時間 (2 : 9)	不安 (9 : 9)	利用者 (2 : 9)	

※()内は左側が当該カテゴリに含まれる語彙数、右側が当該カテゴリに含まれる分析単位数をそれぞれ表す。

3. 主成分分析の結果

作成されたカテゴリ間の関連を明らかにするために主成分分析を行ったところ、固有値1以上の成分が10個見出された。成分1と成分2の成分負荷を布置したものが図1である。内容を考慮してカテゴリを○で囲み、全7個のグループが作成された。しかし、より詳細な解釈を行うため、主成分分析によって得られた成分負荷行列に対してクラスター分析を行なった。

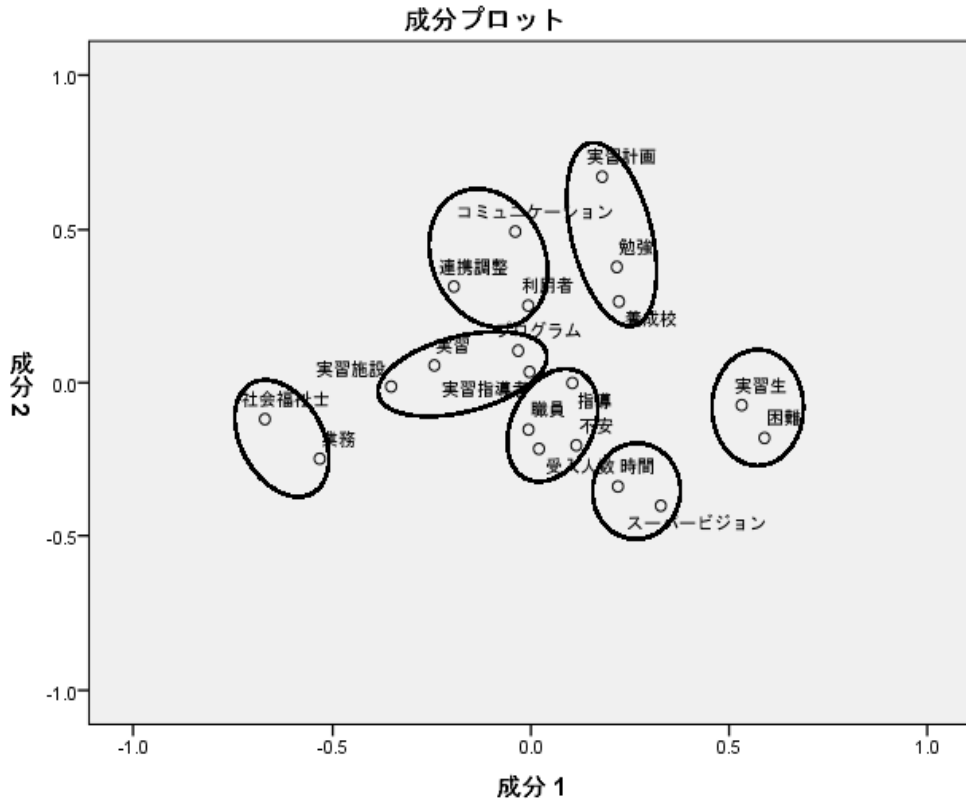


図1 主成分分析の結果

4. クラスター分析の結果

主成分分析で得た成分不可行列にクラスター分析を実施した。抽出法にはウォード法、測定方法に平方ユークリッド距離を用いた。クラスターとして解釈可能な距離を14

と判断したところ7クラスターが抽出され、図2の結果を得た。抽出された各クラスターについて、それぞれに含まれるカテゴリ及び当該カテゴリに含まれる語彙、元テキストデータの内容を考慮し、次の通りに解釈した。

クラスター1には〈業務〉〈社会福祉士〉が含まれていた。このクラスターは、「スーパーバイザーは支援者として担っている日々の〈業務〉を遂行しながら、スーパーバイザーの〈社会福祉士〉という専門職を育てる〈業務〉の難しさ」を表していると解釈した。〈業務〉には、日々の仕事や業務、専門職が担う役割や期待される役割を表す語彙が含まれていた。

クラスター2には〈不安〉〈職員〉〈実習〉が含まれていた。このクラスターは、「スーパーバイザーがスーパーバイザーの〈実習〉状況を理解しつつ、〈実習〉が実りになっているのか自信がなく〈不安〉であること、スーパーバイザーだけの関りだけでなく〈実習〉の機会が様々な職種の〈職員〉全体で関わる必要性」を表していると解釈した。

クラスター3には〈実習指導者〉〈実習施設〉〈コミュニケーション〉が含まれていた。このクラスターは、「〈実習施設〉は学びの場であるが分野・領域は様々であり、〈実習指導者〉であるスーパーバイザーはスーパーバイザーである実習生との〈コミュニケーション〉で色々な工夫をして関わっている」現状を表していると解釈した。

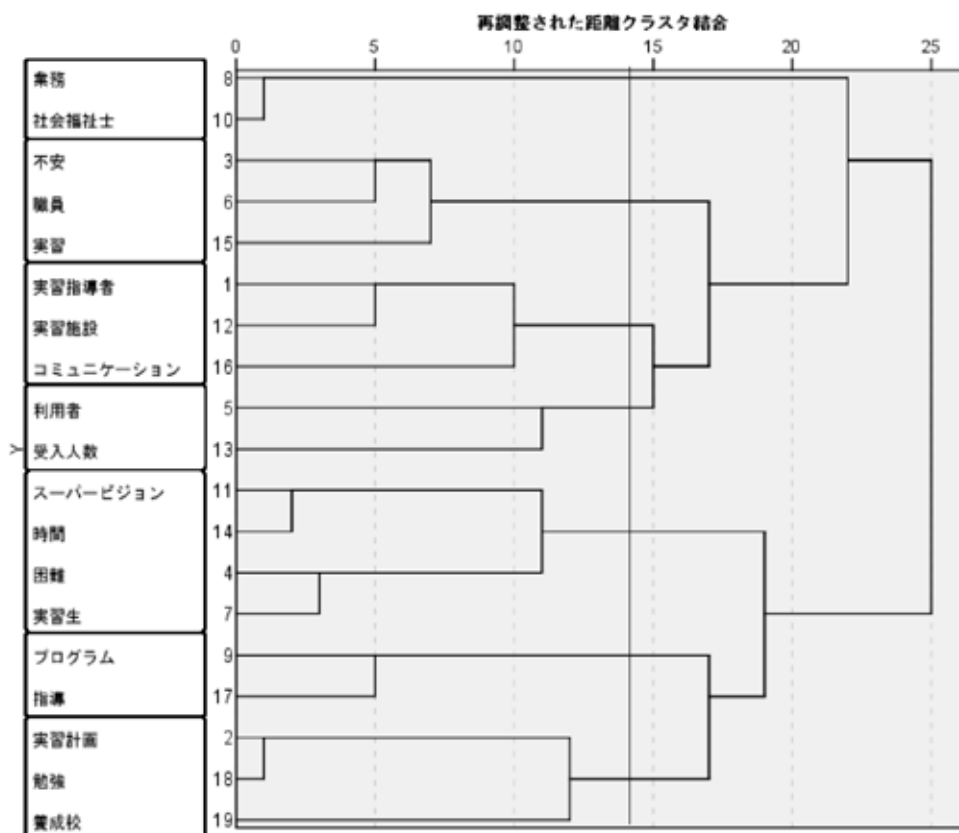


図2 Ward法を使用するデンドログラム

クラスター4には〈利用者〉〈受入人数〉が含まれていた。このクラスターは、「実習の場は〈利用者〉の生活の場であり、〈利用者〉との直接的な関わりを基盤とするため、実習生の〈受入人数〉に限界があり、その〈受入人数〉によって実習生同士の関係性に影響を与える」という難しさを表していると解釈した。

クラスター3とクラスター4は、距離が15の地点でつながっていることから、両者の課題は相互に関連していると解釈された。また、クラスター2とクラスター3・4は、距離が17の地点でつながっていることから、両者の課題は相互に関連していると解釈された。

クラスター5には〈スーパービジョン〉〈時間〉〈困難〉〈実習生〉が含まれていた。このクラスターは、「限られた〈時間〉の中で〈実習生〉の学びや力を引き出す〈スーパービジョン〉を行うことの〈困難〉」という課題を表していると解釈した。

クラスター6には〈プログラム〉〈指導〉が含まれていた。このクラスターは、「社会福祉士の実習指導という〈プログラム〉に基づき、実際の支援現場で実習生であるスーパーバイザーをどのように〈指導〉していくか」という課題を表していると解釈した。

クラスター7には〈実習計画〉〈勉強〉〈養成校〉が含まれていた。このクラスターは、「実習でスーパーバイザーである実習生がどんなことを習得したいのか、そのためにはどのような実習内容が必要かといった〈実習計画〉が実習先との擦り合わせが十分でなく、実習期間中に実践で〈勉強〉することと実習前に積み上げてきた机上の〈勉強〉との繋がりに対して課題があり、〈養成校〉の関わりも実習スーパービジョンではなく事前・事後の事務的な関わり、実習中の学生指導が中心である」現状が示されていると解釈した。

クラスター6とクラスター7は、距離が17の地点でつながっていることから、両者の課題は相互に関連していると解釈された。

IV. 考 察

1. 実習指導者が実習スーパービジョンにおいて抱えるジレンマ

クラスター1・クラスター5の結果が示すように、実習指導者は、自分自身も支援者として日々担っている社会福祉士としての日常業務の中で、言語化が難しいソーシャルワークの専門的な実践を限られた時間の中で実習生に伝え、次代を担うソーシャルワーカーの卵であるスーパーバイザーの育成にも関わらなければならない使命を担っている。実習指導者はスーパーバイザーとして、実習担当教員と同じ立場で教育するというよりも、実習生の知識や技術を実践現場に合わせて変換することを促進する人となる⁸⁾。

調査対象者であった実習指導者であるスーパーバイザーは、これらの役割や使命を自覚しているが故に、実際の現場における支援者とスーパーバイザーという二重の立場に身を置きながら、クラスター6が示すように多くの困難の中、個人で工夫をしながら実習スーパービジョンを実践していた。目の前の利用者支援を疎かにせず、実習生への育成も両立するためには、スーパーバイザー個人の力量や工夫に頼るというミクロレベル

の実習スーパービジョンの実践ではなく、メゾレベルの施設職員全体で実習に関わることや実習受け入れ施設と養成校である学校が協力した実習スーパービジョンの必要性があると考えられる。

2. 実習スーパービジョンを行う環境整備の課題

クラスター3が示すように実習を受け入れる施設は、行政・高齢者・障害・児童等様々な領域の施設であり、社会福祉の支援を必要とするクライアントや利用者の生活と直接触れる現場である。その現場をフィールドとして行われる相談援助実習は、限られた時間、環境の中で行われるため、実習スーパービジョンもその影響を受ける。クラスター4やクラスター5が示すように具体的に実習を受け入れる人数に影響を与えることや効果的な実習スーパービジョンの実施の難しさが示されている。効果的な実習スーパービジョンを実施していくには、環境要因の解決が求められていると考えられる。

窪田は、「実習におけるスーパービジョンのプロセスは「教える→ささえる→みとどける」という学生の意欲を育み、支持するスーパービジョンの必要性」を強調し、事前学習での小集団化の取り組みや実習学生へのスーパービジョンを行うツールとしてのコミュニケーション・シートの活用を示唆している⁹⁾。具体的な環境整備として、実習指導者がスーパービジョンを行う際に活用できるツールに関する研修、実習指導者と養成校、実習を受け入れる側・依頼する側が実習を行う上での困難を共有し、解決していくために意見交換ができる場を整えること、実習指導者同士の横の繋がりを構築し互いに支えあったり、実習スーパービジョン等について情報交換をしたりする環境を整えていくことなどが考えられる。

3. 実習スーパービジョンを担うスーパーバイザーとしての自信のなさ

今回の調査では、「実習スーパービジョンを行う際に感じている現状と課題について話し合う」テーマを伝えたが、困難や不安などの課題が中心に語られていた。実習スーパービジョンの経験が浅い人から長年担当している人まで参加していたにも関わらず、実習指導者として自信をもってできている実践に対する語りがほとんどなかったことは今回の調査の特徴ともいえる。

実習スーパービジョンに対してスーパーバイザーが感じることは、スーパービジョンをよく理解していないという不安や、自分自身の知識や技術がスーパーバイザーとしてふさわしいものか疑問を持ちがちであることが指摘されている¹⁰⁾。

クラスター2が示すように、不安・心配、困難が語られていた。研修やフォローアップは行われているが、多くの実習指導者が抱える困難や不安を軽減し、自身が行なう実習スーパービジョンに自信を持つことのできる研修や機会が今後求められている。また、フォローアップ体制が構築され、実習指導者の成長だけでなく、実習指導者を返して効果的な実習スーパービジョンを実習生に提供できることに繋がっていくと考えられる。

V. 研究の限界と課題

本研究では、一つの研修会で得られたインタビューデータを基に、実習指導者が感じている実習スーパービジョンの現状と課題を明らかにした。研究方法にも示したように、本研究で用いたインタビューの逐語録データに対するテキストマイニング分析は、仮説の検証及び結果の一般化のためではなく、仮説の生成を目的とした分析であることは避けられない。本研究の結果及び考察として記述した内容も、一般化することはできず、インタビューにご協力いただいた対象者が所属する機関について、前述のような現状と課題があるのではないかと示すことに留まっている。しかし、ここで示された結果及び考察は、他の地域や機関に関する研究が蓄積されてきた際に、より多くの意味を持つこととなる。今後、さらにデータの収集および分析を進めることで、現場が求める実習スーパービジョンの展開に対する課題や対応策について整理できるものと考ええる。

また、他領域の専門職の実習指導・養成からも専門職養成と効果的な実習指導について示唆が得られる可能性がある。今回は調査を広げることができなかったが、今後の課題としたい。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、社会福祉士相談援助実習の受け入れ先である施設・機関の実習担当者の皆様には調査・研究の趣旨を理解し、調査協力を快く引き受けていただきました。ご協力いただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

〈引用文献〉

- 1) 荒川義・藤井美和・大和三重他 (2003)「社会福祉実習におけるスーパービジョンの研究—スーパービジョンに対する学生の満足度に影響を与える要因について—」『関西学院大学社会学部紀要』95, 71-78.
- 2) 蒲生俊宏・岸野靖子・黒川京子他 (2011)「実習先と共に構築するスーパービジョンと実習マネジメントに関する研究」日本社会事業大学社会事業研究所.
- 3) 内田充範 (2013)「日誌から探る実習スーパービジョンの実際—実習指導者としての社会福祉士の役割—」『山口県立大学社会福祉学部紀要』19, 17-26.
- 4) 小松尾京子 (2012)「実習指導者の実習スーパービジョン実践に関する困難さの要因—実習指導者講習会参加者に対するアンケート調査から—」『社会福祉士実習教育園田センター年報第9号』日本福祉大学.
- 5) 植田寿之・塩田祥子 (2001)「実習生の『気づき』を支えるスーパービジョン—ソーシャルワーク実習の振り返りから—」皇学館大学社会福祉学部紀要(4), 91-99.

- 6) 原田奈津子・高島恭子・浦秀美 (2013)「社会福祉士実習におけるスーパービジョン実施の現状と課題—実習指導者、実習生への調査結果から—」『日本社会福祉学会第61回秋季大会資料』385-386.
- 7) 藤井美和・小杉考司・李政元 (2005)「福祉・心理・看護のテキストマイニング入門」中央法規, 10, 26, 38-42.
- 8) 小松尾京子 (2015)「実習指導者による実習スーパービジョンの課題—教育的機能を中心として—」『日本福祉大学社会福祉論集』日本福祉大学, 133.
内田治・川嶋敦子・磯崎幸子 (2012)「SPSSによるテキストマイニング入門」, オーム社, 11, 62.
小川智子・清水正美 (2014)「社会福祉士養成における実習指導体制構築への取り組み—実習反省会・実習意見交換会を中心として—」社団法人日本社会福祉士会『社会福祉士実習指導者テキスト第2版』, 中央法規出版.
- 9) 窪田暁子・井上修一・大藪元康他 (2007)「社会福祉援助技術現場実習スーパービジョンの研究 (その1): 実習学生スーパービジョンの意義」中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要8, 105-109.
- 10) Pettes, Dorothy. E. (1967) *Supervision in Social Work* (=1976, 松本武子・木村嘉男訳『社会福祉のスーパービジョン』誠信書房.)

(受付日 2017年9月29日)

(受理日 2017年12月6日)

Abstract

Recent years have seen an increasing demand for professionalized social workers in terms of quality as well as quantity, given the diverse social issues that need to be tackled. The need for improvement in curricula and methods to implement field training for students to become certified social workers is discussed frequently. More than ever before, field training supervisors are expected to have strong coaching abilities. This study is an attempt to identify the current situations and issues faced by supervisors in field training programs. A focus group interview was held with the field training supervisors. The interview data was analyzed using text mining techniques. These analyses revealed that issues facing supervisors were classified into seven categories. These classifications were discussed in relation to the current situation of and issues. The supervisor's dilemma, the improvement of field training for supervisors, and supervisors' lack of self-confidence are revealed as issues affecting the management of field training supervision.

Key words : Social workers

field training for social work

text mining

field training supervision